学 位 論 文 要 旨

保健医療学研究科 保健医療学専攻
平成31年度入学
氏名 木村 葉子

学位論文研究指導
教員氏名　　安野 富美子 教授

学位論文題目 妊婦のマイナートラブルに対する温灸療法の効果

【目的】　本研究は、妊婦のセルフケアによる温灸療法がマイナートラブル症状とQOLに及ぼす効果について明らかにすることを目的とした。
【方法】　研究参加者は正常な妊娠経過を辿る妊婦とした。温灸群と対照(非施灸)群を設定し、準ランダム化比較試験により検討した。温灸群は、セルフケアで妊娠24週から分娩直前まで「三陰交 SP6」を基本穴に週3日以上施灸した。妊娠37週から「至陰 BL67」穴を追加し、妊娠週数と個々の症状に応じて施灸数と下肢の経穴を追加した。温灸は台座付き間接灸(長生灸レギュラー、山正社製、設定温度約57度)を用いた。メインアウトカムは、マイナートラブル19症状の苦痛度、セカンダリーアウトカムは、SF-36によるQOLとし、評価時期は、①妊娠16～24週、②28～29週、③32～33週、④37～38週の全4回とした。苦痛度は症状の発症頻度と程度(つらさ)の積から算出した。両群の苦痛度及び発症頻度、程度、発症率、QOL(SF-36) における時間経過による違いについては、二元配置反復測定分散分析を行い、次に、各時期の違いについてはSteelの検定を行った。
【結果】　分析対象は初産婦温灸群117例、対照群80例(QOLは温灸群114例、対照群77例)であった。全19症状の苦痛度総和と程度において、群間と時間の交互作用に有意差が認められた（$p<0.05$）。対照群では高値に変化したが、温灸群は増加がみられず3回目で有意に低値であった。症状別では「こむら返り」の2～4回目の苦痛度は、対照群に比し温灸群が有意に低値であった。また、 SF-36下位尺度の身体機能と身体的側面のQOLサマリースコアが対照群に比し、温灸群が有意に高値であった。温灸群の有害事象は熱傷Ⅰ度5例、浅達性Ⅱ度1例で、いずれも一過性で医療的処置は必要ではなかった。
【考察と結語】　セルフケアによる温灸療法がマイナートラブルを軽減し、初産婦の身体活動に対するQOLを維持することに貢献できたと考えられた。また、セルフケアで施灸したことで、心理面でも自分で対処できるという自己対処スキルの向上から、つらさ軽減への効果を生じさせた可能性が考えられた。以上の結果から、温灸によるセルフケアは、初産婦のマイナートラブルを軽減し、QOLの低下を防ぎ、妊婦のマイナートラブル対策の選択肢の一つとして有効であることが示唆された。